

「チスル」 ★★★

2014（平成26）年2月19日鑑賞くビジュアルアーツ専門学校・大阪試写室>

監督・脚本：オ・ミヨル
ヨンピル / ヤン・ジョンウォン
キョンジュン / イ・ギョンジュン
マンチョル / ソン・ミンチョル
サンピョ / ホン・サンピョ
ウォンシクの叔父 / ムン・ソクボン
ムドン / パク・スンドン
スドク / カン・ヒ

2012年・韓国映画・108分

配給 / SUMOMO

<映画作りとは？作りたい映画を作るとは？>

私は現在弁護士として、第9回大阪アジア映画祭をめぐって「ある法律相談案件」を処理しているが、それを通じて考えるのは、映画作りとは一体ナニ？ということ。インディーズ映画と商業映画との違い、作りたい映画と売りたい映画との違いは昔からよく議論されているが、最近は後者のウエイトが大きくなりすぎているのでは？そんな印象が私には強い。とりわけ、ハリウッドのアメコミ大作と日本のテレビドラマの延長のような映画にその傾向が強い。アメリカのサンダンス映画祭や大阪のアジア映画祭における「インディ・フォーラム部門」などは前者の育成を目指したのだが、さてその広がりには・・・？

そんな状況下、私は韓国のオ・ミヨル監督が2億5千万ウォンという、一般商業映画の10分の1にも満たない制作費で完成させ、2013年の第29回サンダンス映画祭でワールドシネマ・グランプリ等を受賞したという本作を観て、まさに驚愕！済州（チェジュ）島出身のオ・ミヨル監督が、同じく済州島出身の無名の俳優たちを使い、モノクロで撮影したのだから、金がかからなかったのは当然だが、そのテーマは何と歴史から抹殺された、韓国現代史最大のタブーである「済州島4・3事件」。

「チスル」とはジャガイモのことだが、なぜそんなタイトルを？また、原題に「終わらない歳月2」というサブタイトルがついているのは、なぜ？テレビで宣伝されているような誰もが知っている邦画は半分寝ながらでもわかるが、本作のような「難しい」映画は事前と事後の勉強が不可欠だし、観ていて疲れることまちがいない。ところが逆に、そんな映画を観ると、ものすごく充足感が！こんな映画を観る中で、映画作りとは？作りたい映画を作るとは？の意味をじっくりと考えてみたい。

<虐殺事件はあちこちで。「済州島4・3」事件とは？>

いろいろな時代、いろいろな国で、いろいろな虐殺事件があったことは歴史上の事実。1937年の「南京大虐殺」やそこでの「30万人斬り」は疑問ありだが、例えば日本でも織田信長による1571年の「比叡山焼き討ち」や1923（大正12）年の関東大震災における朝鮮人大虐殺はレッキとした事実。

また、ポーランドの巨匠アンジェイ・ワイダ監督の『カティンの森』（07年）（『シネマルーム24』44頁参照）にみる「カティンの大虐殺」、台湾の侯孝賢監督の『悲情城市』（89年）（『シネマルーム17』350頁参照）にみる

「二・二八事件」（戦後、中国から台湾に渡った国民党政権が1947年2月28日、台湾住民の抗議行動を武力弾圧した事件）、さらに韓国のキム・ジフン監督の『光州5・18』（07年）（『シネマルーム19』78頁参照）にみる「光州事件」（1980年5月18日から10日間続いた朝鮮半島の最南端の全羅南道にある光州での、戒厳軍と市民との戦い）は有名だ。さらに、2012年の第7回アジア映画祭でコンペティション部門の「観客賞」を受賞した、ウェイ・ダーション監督の『セデック・バレ』（11年）は、1930年に日本統治下の台湾で起きた抗日暴動・「霧社事件」における先住民セデック族の大虐殺を描いたものだった。

ウィキペディアによれば、「済州島4・3事件」は、「1948年4月3日に在朝鮮アメリカ陸軍司令部軍政府支配下にある南朝鮮（現在の大韓民国）の済州島で起こった島民の蜂起にともない、南朝鮮国防警備隊、韓国軍、韓国警察、朝鮮半島本土の右翼青年団などが1954年9月21日までの期間に引き起こした一連の島民虐殺事件を指す」と解説されているが、私を含め多くの日本人はこんな事件を知らないはずだ。私は1997年に韓国旅行の手始めとして済州島観光に行ったことがあるが、済州島は年間1千万人が訪れるハワイやバリ島を上回る観光地。しかし、そこにこんな大虐殺事件があったとは！さて、オ・ミヨル監督はそんな事件をテーマに、どんな映画作りを？

<暴徒！無条件射殺！こんな命令あり？>

本作冒頭、「海岸線5kmより内陸にいる人間を暴徒と見なし、無条件で射殺せよ。」という字幕が表示され、以降、村民たちの逃避と軍人たちの「暴徒」鎮圧の姿が描かれていく。南朝鮮（今の韓国）に南朝鮮労働党があったこと、島民の不満を背景とした武装蜂起が行われたことは事実だが、本作に登場してくる島民たちが暴徒？オ・ミヨル監督は本作で特段の政治的主張をするわけではないが、「それはちがうだろう！」ということは、誰が見てもわかるはずだ。

他方、軍人は絶対に上官の命令に従わなければならないから、「裸で雪の上に立っている！」と命令されれば、その命令がいくら理不尽であっても従わなければならない。日本陸軍における古参兵の新兵（二等兵）いじめは、『人間の条件』（全6部作）（59～61年）（『シネマルーム8』313頁参照）や勝新太郎の『兵隊やくざ』シリーズ（65年）等を観れば明らかだが、軍隊システムの理不尽さは韓国軍も同じということが本作を観ているとよくわかる。ストーリー中には、懲罰を受けている2人の兵隊による「いっそ、脱走しようか？」「しかし、捕まったら銃殺だぞ」との会話が登場するほどだ。したがって、暴徒と見なされて無差別に殺されていく島民の悲惨さはもちろんだが、イヤイヤながら理不尽な命令に従って殺戮行為をしなければならぬ兵隊たちも大変だ。

もっとも、切羽詰まった状況下での、島民たちの会話も軍人たちの会話もそれぞれ切実なものだ。もっとも私的にはそこでの会話に、何となく「ユーモア」も感じられるのが、せめてもの救いだったが、そんな「甘い」状況はいつまで・・・？

<村の行方は？「クンノルケ」とは？>

本作は当初、煙の中で目をこすりながら戸をあけて家の中から出てくる島民の姿が描かれるが、この煙は一体ナニ？村を焼きつくし、島民を皆殺しにせよという命令が出されたことによって、この村は一体どうなるの？モノクロで撮影されたスクリーンはあくまで暗く陰鬱。そして、村の中で動けないまま殺されていくおばあさんの姿を見ていると、その命令の理不尽さが否応にも浮かび上がってくる。さらに、戦争にはつきもの（？）の「レイプシーン」も村の中に登場するが、済州島出身のオ・ミヨル監督はこんなシーンをどのような思いで撮っているのだろうか？

他方、済州島には世界自然遺産として広く知られている天然溶岩洞窟がたくさんあるそうだ。そして、「クンノルケ」とは、大きく広い洞窟という意味の言葉らしい。1945年3月の「沖縄戦」を描いた『ひめゆりの塔』（53年）では、洞窟の中に隠れた民間人たちの、栗林忠道大将率いる日本陸軍の戦いを描いた『硫黄島からの手紙』（06年）では洞窟の中に隠れながら戦う軍人たちの生活が描かれていたが（『シネマルーム12』21頁参照）、それは悲惨なものだった。本作導入部では、兵隊の目から逃れるため、ちょっとした穴の中に身体を寄せ合って逃げ込む島民の姿が少しコミカルに描かれている。しかし、大きな「クンノルケ」を見つけ、その中に逃げ込んだいくつかの家族が「チスル」を分け合う姿や、夜間に「クンノルケ」を抜け出して新鮮な空気を吸う姿を見ていると、思わず涙が溢れてくる。もっとも、そんなシーンが続く中でも、村の様子を見に行く若者の姿などを通じて、逃げ出した島民たちのさまざまな「営み」が小さなドラマとして描かれるので、それに注目したい。しかし、その「営み」も一つまた一つとつぶされていき、最後には火炎放射器で焼かれた硫黄島や沖縄の洞窟と同じような状況が「クンノルケ」でも・・・。

オ・ミヨル監督がスクリーン上にはじめて描いた「済州島4・3事件」にみる、焼き尽くされた村の悲劇と「クンノルケ」の悲惨さを、しっかり目に焼き付けた。

<映画が持つ「考えさせる力」を本作でじっくりと！>

映画は本来「エンタメ」のための芸術だが、同時に映画は人々に「考えさせる力」を持った芸術。日本では製作委員会方式による「予定調和」のような映画やアホバカ・バラエティーの延長のような映画が目立つが、オ・ミヨル監督の本作はそれとは全く正反対の映画。キム・ギドク監督の映画は一貫してそれを目指しながら、それなりの興行収入を上げているから立派なもの。また、私も星5つをつけたヤン・イクチュン監督の『息もできない』（08年）（『シネマルーム24』157頁）はインディペンデント映画として異例の大ヒットを記録したらしい。しかし本作は、その『息もできない』を超える大ヒットとなったうえ、2013年米サンダンス映画祭のワールドシネマ・グランプリの他2012年韓国釜山国際映画祭の4部門賞などたくさんの賞を受賞したから、立派なものだ。

韓国の俳優には美男美女が多く、著名なスターもたくさんいるが、本作では名前を知っている俳優は一人も出演していない。また、役名と俳優名も十分認識できないから、詳しいストーリー展開を書くことは到底ムリ。多くの日本人はきっと私と同じはずだ。しかし、逆に本作が持つ「考えさせる力」はすごい。したがって、本作を鑑賞するについては、一つ一つのストーリーを追うのではなく、全体として何を感じるのかを大切に、その中で「考えるべきこと」を一つ一つしっかり考えていきたい。その最大のポイントはもちろん「済州島4・3事件」の内容とその歴史的な位置づけだが、本作を鑑賞するについてはその政治的側面だけではなく、人間の営みとしての「済州島4・3事件」を考えることが大切だ。映画が持つ「考えさせる力」を本作でじっくりと活用したい。